

PM D 児の心境と看護 (特に車椅子移行期)

国立療養所西多賀病院 西上病棟

佐藤 節子

<はじめに>

PM Dは成長に伴ない進行する。当病棟の入院患者は38名(PM D33名、類似筋萎縮疾患5名)中、小学生29名、中学生6名、義務教育終了者2名、その他1名となっている。症状は歩行が比較的容易で日常生活にほとんど介助を要しない子供から全くの*Bed patient*に近いさまざまな障害度の患者たちである。当病棟に入院中のほとんどの学童は、他の疾患の同年令児より知能指数が低いと評価されている。精神的及び身体的にも、発達途上期にある年代に加えて症状が進行性であることが、心理的にも影響していると考えられる場面にはしばしば遭遇し、いかに対処すべきかが課題となってくる。そこで患者の障害度別における心境の把握に努めアプローチの手立てを研究した。

<研究方法>

子供たちの特にあらたまらない日常の心理状態を把握するため、質問事項を決めておき、受け持ち看護婦がなげない会話のなかで質問することにした。子供たちの状況づくりのため、子供会の際看護者に協力してもらいたい旨を話しておき、抽象的な質問を行ない、いろいろの方向からの答を期待した。

<質問内容>

- ① 歩行児と歩行限界児(車椅子移行期患児)に対して→現在の心境、歩けくなることに関してどのように感じているか。
- ② 車椅子児に対して→現在の心境及び車椅子移行時にどのような気持であったか。

分析及び看護、障害度別にみると1～2度の歩行可能な児童は(13名)、小学校低学年であり、4～9度は小学校高学年及び中学生で占められている。小学校低学年の子供たちは歩行も比較的容易であることから、今の状態からの進行は考えられないという感じが見受けられる。4～6度は小学校高学年と中学生で自我の目ざめる時期でもあり歩行不能になることに対して悲観的な考えをもつのではないかとこの看護者側の予測だったが、調査の結果、車椅子に乗れば行動範囲も広くなるし、転倒という恐怖感もたなくてもよくなるという安心感のほうが強いという意外な結果が得られた。そして再度歩行したいという期待よりはむしろ車椅子を思いのままに動かしたいという期待の方が大きいようだ。車椅子児のほとんどが歩行困難な時期にいらだちがあったと述べているが、これは現実に歩行が困難であること、次第に進行して不可能になるんだという気持からくるものと理解され、この時期の子供たちの気持ちの乱れは、日常生活態度にもさまざまな形で出ていることがある。7度以上の患者(10名)は車椅子も思うように動かさないか、全く移動できない状態であるが、車椅子での行動範囲だけでも拡大されればより楽しい生活がすぐせると感じているようである。

最後にPMD児（特に車椅子移行期）の心境を考え、次のような目的のもとに全職員が協力して援助にあたっている。

- ① 看護者は患児の心理的移行をもよく理解し、疾病の進行度に応じたそれぞれの児童に最も適した環境をつくる。
- ② 歩行訓練や機能訓練を強行することにより不安定な精神状態に落ちこませないように配慮し、精神的安定を保つ。

②) 電動式椅子便器の改良

国立療養所西多賀病院

佐藤義隆 伊東悦子
千田武昭 菊地伊三郎
川村とよ子

<はじめに>

当院におけるPMD者の病床数は160床あり、収容患者も満5才から63才と幅広く、重度の患者が多い。その為看護業務の内容及び看護力の過重等、深く問われているのが現状です。業務内容も殆んどが生活援助であり、その中でも排泄に関する援助は、看護力の大半を要する大きな問題と言っても過言ではありません。使用する患者にとって、又、そのケアにたずさわる介助者にとっても、より安楽にかつ援助しやすいものであれば、患者にとっては安易に介助を依頼することが出来、とりわけ腰痛予防につながると考えます。そうした点で、患者一人一人の体位と、排泄についての個人的習慣などを考慮し、それに適合できる椅子式便器を製作、使用してみた。

<目的>

1. 患者が安心して使用できる事。
2. 拘縮が強度で、筋力低下した患者や、体重のある患者でも、苦痛なく使用出来る事。
3. 介助者の作業能率の向上と、腰痛予防に適する事。

<経過>

手動式では、

1. 体重のある患者には活用しにくい。
2. 患者が望む体位の固定が不十分である。
3. 介助者の労働の負担が大きい。

電動式では、

1. 体重のある患者、変形の少ない患者は、180度リクライニングさせ、ベットからの移動が容易にできる。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

<はじめに>

PMDは成長に伴ない進行する。当病棟の入院患者は38名(PMD33名、類似筋萎縮疾患5名)中、小学生29名、中学生6名、義務教育終了者2名、その他1名となっている。症状は歩行が比較的容易で日常生活にほとんど介助を要しない子供から全くのBed patientに近いさまざまな障害度の患者たちである。当病棟に入院中のほとんどの学童は、他の疾患の同年令児より知能指数が低いと評価されている。精神的及び身体的にも、発達途上期にある年代に加えて症状が進行性であることが、心理的にも影響していると考えられる場面にしばしば遭遇し、いかに対処すべきかが課題となってくる。そこで患者の障害度別における心境の把握に努めアプローチの手立てを研究した。